

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5)

— 弥生時代中期後葉から古墳時代前期(その4) —

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

平成23年度の研究紀要17号より「神奈川県内出土の弥生時代土器棺」について事例の集成と検討を行い、研究紀要18号からは弥生時代中期後葉から古墳時代前期の県内事例の集成を行ってきた。今回は弥生時代中期後葉から古墳時代前期の事例追加とその概要解説を行い、その上で研究紀要18号から本号までに集成した資料に基づいたまとめを行うこととする。

今回の追加事例の集成では、1遺跡6事例を確認した。追加事例については概要解説と検出遺構及び土器棺資料の図を提示し、前号までの集成を踏襲した集成一覧表と文献一覧表の補遺を作成した。さらに集成事例の諸属性をまとめ、第3表として掲載した。概要解説の遺構名の前に付した番号は、前号までの集成から継続した番号を付けていて、集成図や各一覧表と対応している。また、文献一覧表の文献番号も前号からの継続番号である。集成事例の遺跡分布図については、前号に掲載した土器棺出土遺跡分布図と変わらないので、前号を参照していただきたい。図の掲載にあたって、遺構・遺物の検出状況を縮尺1/60、遺物実測図を縮尺1/8とした。図は各報告書掲載よりコピーして使用し、再トレースは行っていない。

追加事例の集成にあたってはプロジェクトメンバーで掲載対象を検討し、追加事例の本文執筆は飯塚が、事例分析についての本文執筆は池田が担当した。(池田)

県内遺跡の追加事例

52. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 1号方形周溝墓 東溝

遺跡は海老名市河原口に所在し、相模川・中津川・小鮎川の三河川が合流する地点の自然堤防上に立地する。第2次調査では、弥生時代中期から古墳時代前期の堅穴住居址148軒、方形周溝墓2基、しがらみ状遺構14基、河道跡2箇所などが検出されている。

1号方形周溝墓は大部分が調査区外にあり、全体の1/3程度が調査された。周溝の方台部側立ち上がり(下端)を基準として方台部の規模を計測した場合、北溝と南溝との立ち上がり間の距離は12.9mを測る。周溝は全周せず、南東隅が途切れている。

陸橋部に接して東溝の南端、溝底からやや浮いて壺の胴部～底部が出土している。胴部上半には縄文を地文として、その上に重ねて沈線による波状文が施文されている。また、部分的に赤彩の痕跡が認められる。現存高17.3cm、底径6.8cm、胴部最大径24.0cmである。弥生時代中期後葉に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

53. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 14号土坑

調査時に土器底部を蓋とした1個体分の完形に近い壺が出土したことから、周辺を精査した結果、土坑状の掘り込みを伴う遺構であることが確認された。掘り込み面が確認された標高は19.71mであるが、本来は

検出面より上位層から掘り込まれ、土坑内に土器が設置されていたものと考えられる。

土坑は、確認面での現存長は長径0.55m、短径0.43m、形状は楕円形を呈する。出土した壺は、検出した土坑の南端に位置し、底部を下にした状態で設置されていた。壺は頸部接続部分で打ち欠き、口縁部～頸部を割取ったものに、他の壺底部の下位部分を打ち欠き、底部を上にした状態で蓋として被せている。土器内は土が充満していたが、土圧によりやや押しつぶされた状態で出土した。

1は壺の底部で、割れ口部分は疑口縁が観察される。底径は8.0cm、現存高7.3cmである。2も壺で、頸部以上を打ち欠いている。残存部分は無文でミガキが施されている。現存高25.8cm、底径11.2cm、胴部最大径28.2cmである。いずれも、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される。

54. 河原口坊中遺跡（第2次調査） 37号土坑

調査時に1個体分と考えられる土器が押しつぶされてまとまって出土したために、周辺を精査した結果、土坑状の掘り込みが確認された。確認面の標高は18.98mである。土坑の確認面での規模は、長径1.33m、短径0.67m、形状は隅丸方形を呈する。覆土は地山をブロック状に含むことから、埋め戻された可能性が考えられる。

1は口縁部に最大径をもつ甕で、口唇部は面取りののちにキザミ、胴部上半には横走羽状の、胴部下半は斜め方向のハケが施される。また、指ナデによる沈線が確認できる。内面はヘラナデされ、底部は網代痕が残る。底部に焼成後の孔が1穴あるが、意図的な穿孔かどうかは断定できない。雲母を特徴的に多く含む胎土で、その形状から、駿河湾沿岸から伊豆地方にかけて分布する「磨消線文甕」と考えられる。口径26.0cm、器高30.2cm、底径7.6cm、胴部最大径22.3cmである。弥生時代中期中葉～中期後葉の古い段階に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

第1表 神奈川県内出土土器棺墓集成（弥生時代中期後葉～古墳時代前期） 補遺

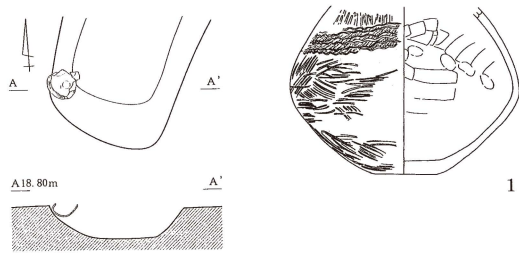
資料番号	所在地 (市区町村名)	遺跡名	遺構名または出土位置	時期	文献 番号
52	海老名市	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期	34
53	〃	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	14号土坑	弥生時代後期以降	
54	〃	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	37号土坑	弥生時代中期	
55	〃	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	225号土坑	弥生時代中期	35
56	〃	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	228号土坑	弥生時代後期	
57	〃	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	229号土坑	弥生時代後期	

※資料番号は第1図中の遺構番号に対応、文献番号は第2表に対応する。

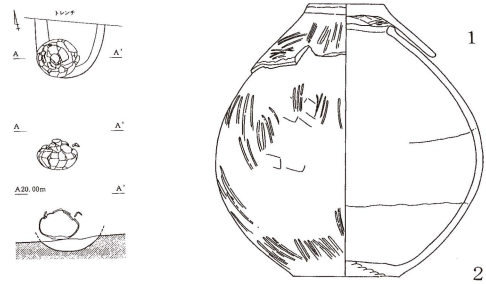
第2表 文献一覧表 補遺

文献 番号	文 献（報 告 書） 名	刊行年	編集機関
34	『河原口坊中遺跡 第2次調査』	2015	公益財団法人かながわ考古学財団
35	『河原口坊中遺跡 第4次調査』	2014	公益財団法人かながわ考古学財団

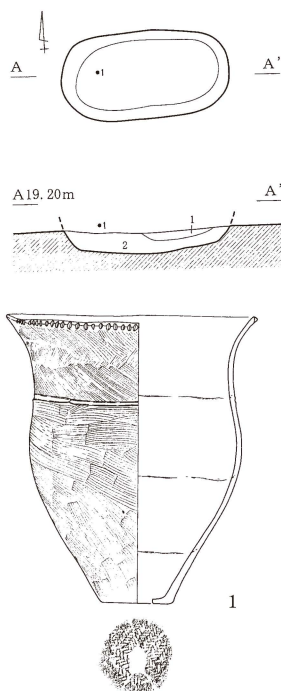
52. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 1号方形周溝墓 東溝



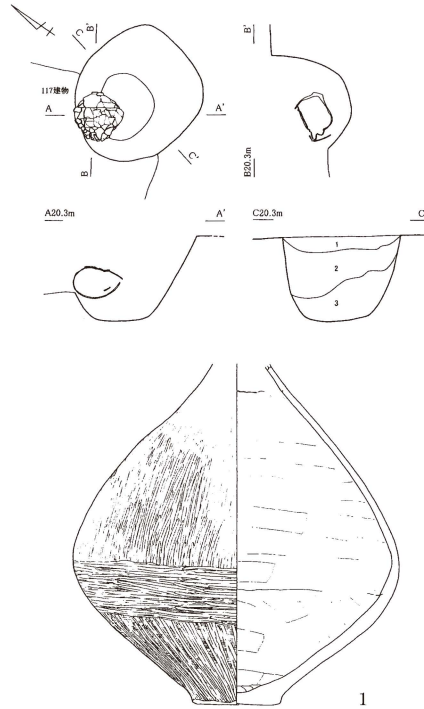
53. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 14号土坑



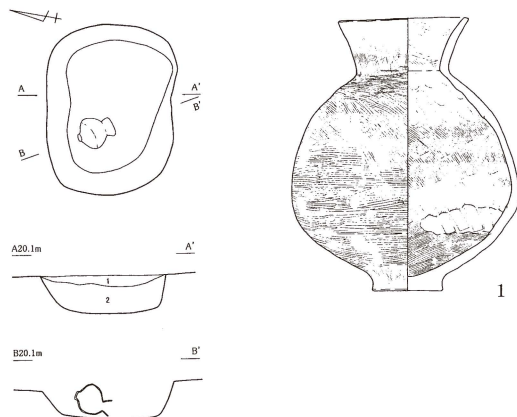
54. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 37号土坑



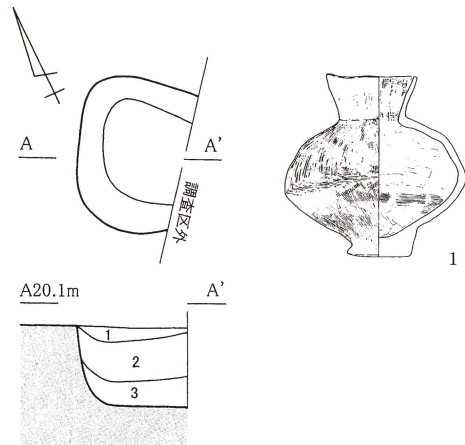
55. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 225号土坑



56. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 228号土坑



57. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 229号土坑



第1図 土器棺集成追加資料 [遺構図1/60、土器1/8]

第3表 神奈川県内出土土器集成（弥生時代中期後葉～古墳時代前期）データ一覧表

資料 番号	所在地 (市区町村名)	遺跡名	遺構名または出土位置	時期	文献 番号	立地	河川流域	出土地 種別	遺構内出土 位置	出土施設
1	川崎市高津区	三荷座前遺跡	環濠 覆土中	弥生時代後期	1	台地	鶴見川	居住城	環濠覆土中	－
2	〃	三荷座前遺跡	1号方形周溝墓 西溝（1）	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	周溝中央底	周溝内土坑
3	〃	三荷座前遺跡	1号方形周溝墓 西溝（2）	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	周溝中央底	周溝内土坑
4	川崎市宮前区	野川神明社境内遺跡	1号土器棺墓	弥生時代後期	2	丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
5	〃	野川神明社境内遺跡	2号土器棺墓	弥生時代後期		丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
6	〃	野川神明社境内遺跡	3号土器棺墓	弥生時代後期		丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
7	横浜市中区	八幡山遺跡	壺棺	弥生時代中期後葉	3	台地	鶴見川	居住城	単独	不明
8	〃	境田遺跡	Y1号住居址P2	弥生時代中期後葉	4	台地	鶴見川	居住城	床面ビット	ビット内
9	〃	歳勝土南遺跡	3号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	5	台地	鶴見川	墓域	周溝？底	周溝内土坑
10	〃	歳勝土遺跡	S3号方形周溝墓 T1号壺棺	弥生時代中期後葉	6	台地	鶴見川	墓域	周溝中央底	周溝内土坑
11	〃	歳勝土遺跡	S4号方形周溝墓 T2号壺棺	弥生時代中期後葉		台地	鶴見川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
12	〃	歳勝土遺跡	T3号壺棺	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	単独	不明
13	〃	歳勝土遺跡	T4号壺棺	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	単独	不明
14	〃	権田原遺跡	F区5号土坑	弥生時代中期後葉	7	台地	鶴見川	墓域	単独	土坑
15	〃	宮原遺跡	H溝内土坑	弥生時代中期後葉	8	台地	鶴見川	居住城	環濠中層	土坑
16	〃	折本西原遺跡	7号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	9	台地	鶴見川	墓域	周溝端部付近	周溝内土坑
17	横浜市長区	東耕地遺跡	壺棺	古墳時代前期	10	台地	鶴見川	墓域	単独	土坑
18	横浜市長北区	山王山遺跡	39号土坑	弥生時代後期	11	台地	鶴見川	居住城	単独	土坑
19	〃	山王山遺跡	1号埋甕	弥生時代後期		台地	鶴見川	居住城	単独	土坑
20	横浜市保土ヶ谷区	上星川遺跡	第12号住居址	弥生時代後期	12	台地	帷子川	居住城	住居内ビット	ビット
21	逗子市	沼間ポンプ場南台地遺跡	3号住居址内壺	古墳時代前期	13	丘陵	田越川	居住城	住居床面	－
22	〃	池子遺跡群 No. 1-A地点	第2号方形周溝墓 北溝	古墳時代前期	14	谷戸内 低地	田越川	墓域	周溝内	－
23	横須賀市	三足谷遺跡	1号墓壙	古墳時代前期	15	丘陵	平作川	居住城	単独	土坑
24	〃	住吉遺跡	第1号住居址覆土内合わせ口壺	古墳時代前期	16	丘陵	平作川	居住城	住居覆土中	－
25	藤沢市	大源太遺跡	1号土壙	弥生時代中期後葉	17	砂丘	片瀬川	墓域	単独	土坑
26	〃	石名坂遺跡第5地点	1号住居址内土壙	弥生時代中期後葉	18	台地	引地川	居住城	住居址壁際	土坑
27	〃	石名坂遺跡第5地点	3号方形周溝墓 南溝	弥生時代中期後葉		台地	引地川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
28	〃	石名坂遺跡第5地点	4号方形周溝墓 西溝	弥生時代中期後葉		台地	引地川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
29	〃	大庭城址公園内遺跡	方形周溝墓S D10 東溝	弥生時代後期	19	台地	引地川	墓域	周溝中央底	周溝内土坑
30	〃	高倉杜蔵遺跡	第1号方形周溝墓 西溝	古墳時代前期	20	台地	境川	墓域	周溝底	周溝内土坑
31	海老名市	社家宇治山遺跡	Y K 3号方形周溝墓 東溝	弥生時代後期	21	自然堤防	相模川	墓域	周溝内	周溝内土坑
32	〃	中野桜野遺跡	11号方形周溝墓 北溝	弥生時代中期後葉	22	自然堤防	相模川	墓域	周溝内	－
33	〃	本郷中谷津遺跡	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期後葉	23	台地	目久尻川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
34	〃	本郷遺跡	25号方形周溝墓 北溝	弥生時代後期	24	台地	目久尻川	墓域	周溝屈曲部底	－
35	〃	本郷遺跡	34号方形周溝墓 西溝	弥生時代後期		台地	目久尻川	墓域	周溝端部底	－
36	〃	本郷遺跡	環濠 覆土上層	弥生時代後期		台地	目久尻川	居住城	環濠上層	－
37	寒川町	大蔵東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝（1）	弥生時代後期	25	台地	小出川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
38	〃	大蔵東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝（2）	弥生時代後期		台地	小出川	墓域	周溝端部底	周溝内土坑
39	〃	寒川町 No. 14遺跡	採集資料	弥生時代後期	26	台地	目久尻川	不明	－	－
40	平塚市	坪ノ内遺跡（第3地区）	S D H01（1号方形周溝墓）	弥生時代中期後葉	27	砂丘	相模川	墓域	周溝屈曲部	－
41	〃	真田・北金目遺跡群	57A・G1区 SK049	弥生時代後期	28	段丘	金目川	居住城	単独	土坑
42	〃	原口遺跡	第37号方形周溝墓 西溝周溝内土坑	弥生時代後期	29	段丘	金目川	墓域	周溝底	周溝内土坑
43	〃	原口遺跡	Y H22号土坑	弥生時代中期後葉		段丘	金目川	墓域	単独	土坑
44	〃	向原遺跡	219号住居址内土壙	古墳時代前期	30	段丘	金目川	居住城	単独	土坑
45	秦野市	砂田台遺跡	16号住居址P7	弥生時代中期後葉	31	台地	金目川	居住城	住居内ビット	ビット
46	小田原市	千代南原遺跡第XVI地点	9号遺構	弥生時代後期	32	台地	酒匂川	居住城	単独	土坑
47	海老名市	河原口坊中遺跡（第1次）	P21地区 Y H1号土坑	弥生時代中期後葉	33	自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
48	〃	河原口坊中遺跡（第1次）	P24地区 遺構外	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住城	単独	不明
49	〃	河原口坊中遺跡（第1次）	P23地区 Y H4号土坑	弥生時代後期		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
50	〃	河原口坊中遺跡（第1次）	P21地区 Y H10号土坑	弥生時代後期以降		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
51	〃	河原口坊中遺跡（第1次）	P21地区 Y H18号土坑	弥生時代後期以降		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
52	〃	河原口坊中遺跡（第2次）	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期後葉	34	自然堤防	相模川	墓域	周溝端部中層	－
53	〃	河原口坊中遺跡（第2次）	14号土坑	弥生時代後期以降		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
54	〃	河原口坊中遺跡（第2次）	37号土坑	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
55	〃	河原口坊中遺跡（第4次）	225号土坑	弥生時代中期後葉	35	自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
56	〃	河原口坊中遺跡（第4次）	228号土坑	弥生時代後期		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑
57	〃	河原口坊中遺跡（第4次）	229号土坑	弥生時代後期		自然堤防	相模川	居住城	単独	土坑

○資料番号及び文献番号は、「神奈川県内出土の弥生時代土器（2）～（5）（研究紀要18～21）」の資料番号・文献番号に対応。
○立地（地形区分）は各報告書の記載に基づいているが、沖積微高地は自然堤防に統一した。
○出土地種別：住居や掘立柱建物で形成される範囲を居住城とし、環濠も居住城の一部とする。墓域は、方形周溝墓の周溝内や方形周溝墓群の範囲内、居住城と区分される土坑群等で形成される範囲とする。単独で調査されている場合、周囲に同時期の住居址が分布していない場合は、墓域とした。
○遺構内出土位置とは、土器が出土した位置が遺構内でどのような位置にあたるかを示し、主に方形周溝墓内での出土位置を細分するための項目である。

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5)

出土 状態	構成 土器数	組合せ状態	棺身 器種	棺身遺存状態	穿孔の有無	棺身土器 胴部最大 径 (cm)	蓋土器 器種	蓋土器状態	備考
正位	2 個体	重ね	壺	頸部以上欠	無し	32.0	甕	破片分散、ほぼ 完形復元	重ね状態推定復元
正位	2 個体	向合	壺	胴部上位以上欠	無し	29.2	壺	胴部上位以上欠	
正位	2 個体	向合	台付甕	脚台部欠	無し	21.0	高坏	脚部欠	
横位?	1 個体	—	壺	不明	無し	約50	—	—	
横位	2 個体?	破片被覆	壺	頸部以上欠	無し	40以上	壺	別個体胴部片	
横位	1 個体	破片被覆	壺	胴部一部欠	胴部打ち欠き	約45	壺	同一個体胴部片	
正位	2 個体	被覆	壺	頸部以上欠	無し	約18	壺	底部のみ	
正位	3 個体	向合+破片 被覆	壺	頸部以上欠	無し	17.3	壺	頸部以上欠	+壺片被覆
正位	1 個体	—	壺	頸部以上欠	無し	49.0	—	—	
正位	2 個体	向合	壺	胴部上位以上欠	無し	35.0	甕	完形、逆位	
正位	2 個体	向合	壺	頸部以上欠	無し	23.5	壺	胴部上半欠	
横位	2 個体	被覆	壺	胴部上位以上欠	胴部穿孔	39.0	壺	破片	
不明	1 個体?	—	壺	底部・頸部以上欠	無し	約36	—	—	土器棺の可能性。
正斜位	2 個体	向合	壺	頸部以上欠	?	約40	甕	?	
横位	1 個体	—	甕	底部欠?	無し	25.6	—	—	内部に骨粉・焼土を含む土。
正斜位	1 個体	—	壺	胴部上位以上欠	無し	50.1	—	—	
正位	2 個体	被覆	壺	頸部以上欠	無し	36.7	高坏	坏部片	方形周溝墓周溝を切る土坑と推定される。
逆位	2 個体	向合	甕	底部(脚部)欠	無し	約24	壺	口縁部のみ	土器棺の可能性。 本集成(2)第4図の18と19は図と キャプションが逆。
正位	1 個体	—	甕	完形	無し	約24	—	—	土器棺の可能性。
正位	3 個体	合口・重ね	台付甕	脚台部欠	無し	18.2	甕	潰れた状態	中位は胴部下半欠の甕。土器棺の上を粘土で被覆。
正斜位	1 個体	—	壺	口縁部大部分欠	胴部打ち欠き	28.8	—	—	胴部穿孔により土器棺の可能性。
正位	3 個体	重ね・向合	壺	胴部上位以上欠	無し	32.8	甕	破砕被覆	内部に骨粉と推定される白い粉。中位は胴部のみの壺。
正位	1 個体	—	甕	完形	無し	22.2	—	—	報告書で墓とする。
正位	2 個体	向合	壺	胴部上位以上欠	無し	34.9	壺	胴部上位以上欠	報告書では再葬墓とする。
逆斜位	1 個体	—	壺	完形	無し	22.0	—	—	
正位	2 個体	向合	壺	頸部以上欠	無し	38.5	甕	完形	甕に補修孔あり。
正位	2 個体	向合	壺	胴部上位以上欠	無し	27.5	甕	口縁部欠	周溝覆土中の土坑と推定される。
横位	2 個体	向合	甕	完形	無し	26.4	甕	完形	周溝覆土中から掘り込まれた土坑。
逆位	1 個体	—	壺	完形	無し	36.4	—	—	
正位	1 個体	—	壺	完形	無し	31.8	—	—	
逆斜位	1 個体	—	壺	口縁部・底部欠	無し	約34	—	—	周溝覆土中の土坑と推定、土器棺と推定。
横位	2 個体	被覆	壺	頸部以上欠	無し	約40	甕	破片	土器棺の可能性。
逆位	2 個体	入れ子	壺	胴部上位以上欠	無し	15.4	甕	完形	
正位	3 個体	重ね・被覆	甕	底部欠	底部打ち欠き	30.1	壺	底部のみ	中位の壺に胴部穿孔あり。
正位	1 個体	—	壺	胴部上位以上欠	無し	62.4	—	—	土器上半は削平されていて不明。
正位	2 個体	重ね	壺	完形	無し	31.3	壺	頸部以上欠	
正位	2 個体	向合	壺	胴部上位以上欠	無し	34.0	壺	完形復元	覆土中から掘り込み。
正位	2 個体	被覆	壺	頸部以上欠	無し	53.7	壺	胴部片	覆土中から掘り込み。上壺の上半削平。
不明	2 個体	破片被覆	壺	頸部以上欠	無し	58.3	壺	胴部下半	土器棺と推定。出土状況不詳、参考資料。
逆位	1 個体	—	壺	頸部以上欠	無し	43.2	—	—	
集合	8 個体	—	壺・鉢	—	—	—	—	—	単棺の土器棺ではない。参考資料。
横位?	1 個体	—	甕	頸部以上欠	無し	22.6	—	—	圧壊して出土。土器棺と推定。
正斜位	1 個体	—	壺	口縁部欠	無し	28.2	—	—	口縁部は削平による欠損。
正位	1 個体	—	壺	胴部上位以上欠	無し	約44	—	—	住居址覆土中から掘り込まれた土坑。
正位	1 個体	破片被覆	壺	底部・胴部上位以上欠	無し	31.2	壺	同一個体底部片	
逆位	1 個体	—	壺	完形	無し	17.5	—	—	報告書では貯蔵穴とするが、土器棺の可能性も指摘。
正位	1 個体	—	壺	完形	無し	8.2	—	—	小型壺。土器棺としては小さい。
正位	2 個体	重ね	壺	口縁部欠	無し	19.7	甕	完形	土器棺の可能性。祭祀的遺構か?
横位	2 個体	被覆?	壺	頸部以上欠	無し	63.6	壺	胴部片	
正斜位	1 個体	—	壺	完形	無し	18.3	—	—	
正斜位	1 個体	—	台付甕	完形	無し	11.6	—	—	小型台付甕。土器棺か?
正位	1 個体	—	壺	胴部上半欠	無し	24.0	—	—	出土位置から、土器棺の可能性あり。
正位	2 個体	被覆	壺	頸部以上欠	無し	28.2	壺	底部のみ	
横位	1 個体	—	甕	ほぼ完形	底部穿孔?	22.3	—	—	底部中央孔は打ち欠いた割れ口ではないが穿孔の可能性。
横位	2 個体	破片被覆	壺	頸部以上欠	無し	34.4	壺	別個体胴部片	別個体破片で棺身開口部を塞ぐ
横位	1 個体	—	壺	完形	無し	24.0	—	—	
不明	1 個体	—	壺	ほぼ完形	無し	19.0	—	—	No. 56と類似例と推定

○組合せ状態：重ね＝重ね合わせ、2 個の土器を同じ向きで重ねている状態。向合＝向かい合わせ、2 個の土器を向かい合わせて重ねている状態。被覆及び合わせ口の状態を除く。 被覆＝棺身の開口部を他の土器で覆い隠す状態。棺身全体を別の土器で覆う場合を含む。 入れ子＝土器の中に別の土器が同じ向きで入っている状態。

55. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 225号土坑

第4次調査では、弥生時代中期から古墳時代前期の堅穴建物址93軒、旧河道などが検出された。

225号土坑は、堅穴建物址の壁付近に土器が露出したため、周辺を精査したところ楕円形の土坑のプランが確認された。土坑の確認面の標高は20.18m、規模は長径1.07m、短径0.93mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

1の土器は壺で、土坑西寄りの中層から出土している。表面が焼けて黒色を呈していた。現存高は35.4cm、底径9.4cm、胴部最大径は34.4cmである。残存部分は無文で、赤彩、ミガキが施される。弥生時代中期後葉に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

56. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 228号土坑

溝を壊して掘り込んでいる不整楕円形の土坑である。確認面の標高は19.95m、規模は長径1.25m、短径1.00mを測る。壺は底面から横向きの状態で出土している。

1の壺は口径13.6cm、器高28.3cm、底径7.2cm、胴部最大径24.0cmである。無文で口縁部はヨコナデされている。弥生時代後期に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

57. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 229号土坑

調査区壁際で検出された。平面形は不整形もしくは不整円形と考えられ、一部は調査区外に延びている。土坑確認面の標高は19.93m、規模は長径1.23m、短径0.83mを測る。

1の壺は口径9.4cm、器高18.9cm、底径6.4cm、胴部最大径19.0cmである。無文でミガキが施される。弥生時代後期に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。（飯塚）

弥生時代中期後葉から古墳時代前期の県内事例についての分析

神奈川県内における弥生時代中期後葉から古墳時代前期の土器棺集成として、本稿での補遺を含めて57事例を集成した。集成にあたっては、骨片が出土しているなどの埋葬遺構として確実な事例はごく限られた例しかないため、「土器棺の可能性のあるもの」を集成の対象に含めている。各報告書において「土器棺」や「壺棺」、「再葬墓」のように報告・紹介されている遺構や、当プロジェクトメンバーによって土器棺の可能性があるかと判断したものを集成している。なお、「土器棺の可能性のある事例（土器、遺構）」とすべきものも含め、便宜上「土器棺」と総称して記述する。

集成した57事例のうち、資料No.13歳勝土遺跡T4号壺棺と資料No.39寒川町No.14遺跡採集資料は出土状況不明の参考資料であり、資料No.41真田・北金目遺跡群57A・G1区SK049は土坑内集合埋納の可能性がある参考資料である。このためこの3事例は本稿での検討対象から除外した。また支流尾No.54河原口坊中遺跡（第2次調査）37号土坑は弥生時代中期中葉に遡る可能性もあるが、本稿では事例集成及び検討の対象に含めることとした。この結果、54事例について分析を行うこととする。

資料の時期区分は、基本的には各報告書の表記に従っているが、本稿では弥生時代中期後葉、弥生時代後期、古墳時代前期の3時期に大きく区分した。弥生時代中期後葉とした時期は、宮ノ台式土器全般の時期が該当し、古墳時代前期とした時期は、いわゆる小型器台や小型高坏が出現する弥生時代終末の時期から布留式併行に入る時期までを含んでいて、弥生時代終末～古墳時代前期とされる時間幅を古墳時代前期と表記し

第4表 時期別集計

	遺跡数	件数
弥生時代中期後葉	15	22
弥生時代後期（以降）	12	25
古墳時代前期	7	7
合計	34	54

第5表 遺跡立地別集計

	遺跡数	件数
丘陵	4	6
台地	19	29
段丘	2	3
砂丘	2	2
自然堤防	3	13
谷戸内低地	1	1
合計	31	54

第6表 河川流域別集計

	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
鶴見川	11	18	8	9	1
帷子川	1	1	0	1	0
田越川	2	2	0	0	2
平作川	2	2	0	0	2
境川（片瀬川）	2	2	1	0	1
引地川	2	4	3	1	0
小出川	1	2	0	2	0
目久尻川	2	4	1	3	0
相模川	4	14	7	7	0
金目川	3	4	2	1	1
酒匂川	1	1	0	1	0
合計	31	54	22	25	7

ている。なお、個別資料の時期において弥生時代後期以降とされている資料は、集計上、弥生時代後期に含めている。以下に、項目ごとに傾向をまとめる。

①時期別事例数について（第4表）

弥生時代中期後葉は15遺跡22例、弥生時代後期（「後期以降」の3例を含む）は12遺跡25例、古墳時代前期7遺跡7例がある。弥生時代中期後葉から後期にかけての事例数、弥生時代後期がやや多いもののほぼ変わりなく、古墳時代前期には大きく減少している。

②遺跡の立地（地形区分）について（第5表）

地形区分の表記については報告書によって異なる区分である場合があるものの、各報告書の記載に従って各事例を地形区分ごとに集計すると、丘陵上が4遺跡6例、台地上が19遺跡29例、段丘上が2遺跡3例、砂丘上が2遺跡2例、自然堤防上が3遺跡13例、谷戸内低地が1遺跡1例である。大きく括れば「台地」（丘陵＋台地＋段丘）＝38例、「低地」（自然堤防＋砂丘＋谷戸内低地）＝16例となる。大きく「台地」と称される地形に立地する事例がおよそ7割であるが、いわゆる「低地」と括れる地形に立地する事例が3割あることは、調査が低地遺跡に及んだことを反映している結果であろう。

③河川流域別の分布状況について（第6表）

河川流域別には、県北東部の鶴見川流域に11遺跡18例、同じく帷子川流域に1遺跡1例がある。また県中央部の相模川流域に4遺跡14例、相模川の支流である小出川と目久尻川流域に合わせて3遺跡6例がある。この2つの地域に多くの事例が集まっているが、この他に三浦半島地域の平作川流域と田越川流域にそれぞれ4遺跡4事例、県中央東部の境川（河口部は片瀬川）流域と引地川流域に4遺跡6事例、県中央西部の金目川流域に3遺跡4事例、県西部の酒匂川流域に1遺跡1事例がある。

河川流域別分布の特徴を時期別にみると、弥生時代中期後葉には鶴見川流域と相模川流域に多く次いで引地川流域に多いが、弥生時代後期には鶴見川流域と相模川流域に多いことは変わらないものの相模川支流の

小出川と目久尻川流域に事例が多くなっている。対して古墳時代前期には、弥生時代中期後葉から後期に事例のなかった三浦半島地域の平作川流域と田越川流域の双方で事例が増えていて、他の河川流域ではこの時期に大きく減少していることと対照的である。

④墓域・居住域別の件数について（第7表）

土器棺とされる遺構は埋葬方法の一つであるが、必ずしも居住域と区分された墓域内に埋設されているものばかりではない。ここでは集成した遺構が墓域内にあるのか、居住域もしくはその他の区域にあったものかをまとめておく。なお、単独で発見されたものなど同時期の居住域から離れた区域にある場合は、墓域として扱った。

対象となる54例のうち、墓域にあるものは20遺跡29例、居住域にあるものは15遺跡25例である。時期別では、弥生時代中期後葉では墓域内に位置するものが13例、居住域に位置するものが9例である。弥生時代後期では墓域内に位置するものが13例、居住域に位置するものが12例ある。古墳時代前期には墓域に位置するものが3例、居住域に位置するものが4例ある。

墓域内にある例についても、土坑による墓域を形成する例はなく、方形周溝墓群の中にあって単独の土坑で存在する例が7例、方形周溝墓の周溝内の土坑に納められている例が15例、方形周溝墓の周溝内にあって土坑の有無は不明ながら土器棺の可能性が推測される例が6例あるが、方形周溝墓の方台部に位置している土器棺の例は見られない。

居住域にある例では、単独の土坑に納められている例が最も多く14例あるが、住居址内で発見されている例もその多くは住居使用中に作られたものではないと考えられ、住居廃絶後に埋葬場所として利用されたものと推定されるものである。

⑤棺構成土器数の傾向について（第8表）

土器棺と推定される遺構には、棺身となる土器のみが残っている場合と、棺身に加えて棺身を延長する役割の土器や棺蓋となる土器など複数土器の組合せで構成されている場合とがある。

今回の集成では、棺を構成する土器の数は1個から3個までがあった。1個だけの例が26例、2個で構成される例が24例、3個で構成される例が4例である。ただし土器1個だけの例は、上部が削平されて棺身土器の開口部を塞ぐ方法が不明である例も含まれていることに留意しなければならない。また、棺身土器の一部の破片をもって開口部を塞ぐ蓋としている例が2例あり、これも土器数1個に含めて集計している。

棺身土器のみの例は、弥生時代中期後葉には10例、弥生時代後期には12例、古墳時代前期には4例である。棺身土器とそれを覆う（開口部を塞ぐ）土器の2個で構成される例は、弥生時代中期後葉では11例、弥生時代後期でも11例、古墳時代前期では2例がある。棺身土器とそれに重ねて棺身を延長する役割の土器および開口部を塞ぐ土器の3個で構成される例は少なく、弥生時代中期後葉に1例、弥生時代後期に2例、古墳時代前期に1例がある。構成土器数は1個もしくは2個が大多数でこの2種類に数的差はなく、時期的には弥生時代中期後葉と後期では特に変化はなく、古墳時代前期にいずれも大きく減少している。

⑥器種組成について（第9表）

複数の土器で土器棺を構成している場合の土器組成について検討する。構成土器数が2個の場合の器種組

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5)

第7表 墓域・居住域別集計

		件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
墓域	周溝内土坑	15	7	7	1
	周溝覆土中(土坑不明)	6	3	2	1
	墓域内 単独土坑	7	3	3	1
	墓域内 単独 不明	1	0	1	0
居住域	環濠内(土坑?)	3	1	2	0
	住居址内(土坑、ピット)	4	3	1	0
	住居址内(掘り込み不明)	2	0	0	2
	居住域内 単独土坑	14	3	9	2
	居住域内 単独 不明	2	2	0	0
合計		54	22	25	7

第8表 構成土器数別集計

構成土器数	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
3個	4	4	1	2	1
2個	14	24	11	11	2
1個	18	26	10	12	4
合計		54	22	25	7

※棺身と同一個体破片で被覆は、1個(単体)扱いとした。

第9表 器種組成別集計

(3個体組成)	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺+壺+壺	1	1	0	0
甕+壺+壺	1	0	1	0
台付甕+甕+甕	1	0	1	0
壺+壺+甕	1	0	0	1
小計	4	1	2	1
(2個体組成)	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺+壺	12	3	8	1
壺+甕	8	7	1	0
壺+高坏	1	0	0	1
甕+甕	2	1	1	0
台付甕+高坏	1	0	1	0
小計	24	11	11	2

第10表 棺身器種別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺	43	19	18	6
甕(台付甕)	11	3	7	1
合計	54	22	25	7

第11表 棺蓋器種別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺	17	5	11	1
甕	11	8	2	1
高坏	2	0	1	1
合計	30	13	14	3

第12表 土器結合方法別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
合わせ口	1	0	1	0
向い合わせ	13	7	4	2
重ね合わせ	6	1	4	1
入れ子	1	1	0	0
被覆	8	2	5	1
破片被覆	5	3	2	0
合計	34	14	16	4

成は、棺身が壺形土器に対して壺形土器を組み合わせる例が最も多く12例、次いで壺形土器に甕形土器を組み合わせる例が8例であるが、時期的傾向として弥生時代中期の例では壺形土器に甕形土器を組み合わせる例が7例と多いのに対して、弥生時代後期には壺形土器に壺形土器を組み合わせる例が8例と、こちらの方が多数となる。3個の土器で構成される事例は総数が4例と少なく、壺形土器だけで構成される例、甕形土器だけで構成される例、壺形土器に甕形土器の例、甕形土器に壺形土器の例がそれぞれ1例ずつであり、特に偏重はない。

⑦棺身・棺蓋に利用される土器の器種について（第10・11表）

棺に利用される器種の傾向として、まず棺身に使われる土器の器種は、壺形土器43例、甕形土器（台付甕形土器を含む）が11例であり、8割を壺形土器が占めていて、弥生時代中期後葉から古墳時代前期まで圧倒的優位は変わらない。また棺蓋に使われる器種は、壺形土器、甕形土器、高坏形土器がある。棺蓋土器は開口部を閉塞するための土器であり、破片の場合もあって、また棺身自身の破片を用いている場合もある。総数では壺形土器が17例、甕形土器が11例、高坏形土器が2例である。時期別には弥生時代中期後葉には棺蓋13例中5例が壺形土器、8例が甕形土器で、甕形土器がやや多いのであるが、弥生時代後期には棺蓋14例中11例が壺形土器であり、壺形土器が大多数となっている。

⑧土器結合方法について（第12表）

構成土器数2個以上の場合の土器の結合方法を、6つに大別した。6つの方法は、ほぼ同じ大きさの土器を向かい合わせにして口縁部と口縁部を合わせるように組み合わせる「合わせ口」、大きさに差のある土器の口縁と口縁部もしくは開口部を向かい合わせにして一方がもう一方にやや被さるように組み合う組合せ方を「向かい合わせ」、一方の土器の口縁部（開口部）に同じ向きでもう一方の土器を挿し込むように重ねる「重ね合わせ」、一方の土器の中にもう一つの土器を同じ方向で挿し込んで重ねてしまう「入れ子」、一方の土器の開口部もしくは全体をもう一つの土器で覆ってしまう「被覆」、土器の破片を用いて棺身となる土器の口縁部もしくは開口部を覆う「破片被覆」とした。「合わせ口」と「向かい合わせ」は類似形態であるが、敢えて区分することとした。この6つの分類では、「向かい合わせ」とした組合せ方が13例と最も多く、次いで「被覆」8例、「重ね合わせ」6例、「破片被覆」5例の順に多く、「合わせ口」と「入れ子」が1例ずつという結果となった。

⑨棺身遺存状態について（第13表）

棺身である土器の遺存状態は、上部が削平されている事例も含まれているが、出土時の状態で、完形もしくはほぼ完形のものから、口縁部欠失、頸部以上欠失、胴部上位以上欠失、胴部上半欠失、底部欠失などがある。土器の一部が欠失していることは、後世に削平されたことによって欠失している場合以外は、意図的な行為による結果として重視すべきことであり、「打ち欠き」と称して区別すべきであるが、ここでは遺存状態として「欠失」と表記する。完形およびほぼ完形の状態で遺存している例は14例あり、弥生時代中期後葉の例が4例、弥生時代後期の例が8例、古墳時代前期の例が2例で、弥生時代後期の例が多い。口縁部ないし胴部上半欠失の例の中では、頸部以上欠失が16例と最も多く、次いで胴部上位以上欠失が12例あり、この2種類で28例あって集成事例の半数以上を占めている。このうち頸部以上欠失の事例は弥生時代中期後葉

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5)

第13表 棺身土器遺存状態別集計

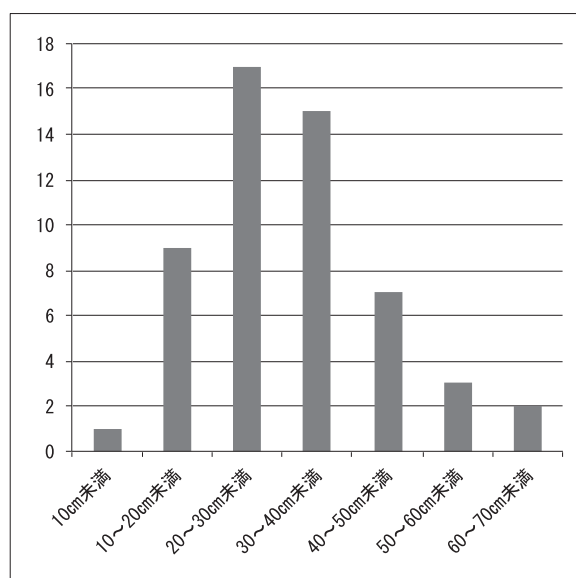
	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
完形・ほぼ完形	14	4	8	2
口縁部欠	4	2	1	1
頸部以上欠	16	9	6	1
胴部上位以上欠	12	5	4	3
胴部上半欠	1	1	0	0
底部欠	4	2	2	0
脚台部欠	2	0	2	0
不明	1	0	1	0
合計	54	23	24	7

第14表 埋設状態別集計

	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
正位	18	28	11	11	6
正斜位	5	6	3	2	1
横位（横位？）	7	12	5	7	0
逆位	5	5	2	3	0
逆斜位	2	2	1	1	0
不明	1	1	0	1	0
合計		54	22	25	7

第15表 棺身土器サイズ（胴部最大径）の分布

	10cm未満	10～20cm未満	20～30cm未満	30～40cm未満	40～50cm未満	50～60cm未満	60～70cm未満
中期	1	4	8	4	4	1	0
後期	0	5	7	7	2	2	2
古墳前期	0	0	2	4	1	0	0
全体	1	9	17	15	7	3	2



第2図 棺身土器サイズ（胴部最大径）分布図

には9例であるが、弥生時代後期には6例と明らかな減少傾向を示している。

⑩埋設状態（出土状態）について（第14表）

土器棺と推定される土器が埋設された状態には、棺身となる土器を基準として、口縁部を上方へ向けて置いた正位、口縁部を下へ向けて置いた逆位、横たえた状態に置いた横位、口縁部を上にして斜めに置いた正斜位、口縁部を下にして斜めに置いた逆斜位などの埋設状態が認められる。

最も多く認められるのは正位の状態であり、18遺跡で28例がある。次いで多いのが横位の状態であり、7遺跡で12例がある。この他には正斜位が5遺跡6例、逆位が5遺跡5例であり、逆斜位は2遺跡2例のみである。いずれの配置状態も時期別には弥生時代中期後葉と弥生時代後期とではほぼ同数で、弥生時代中期後葉には正位が11例、横位が5例、その他が6例の合計22例、弥生時代後期には正位が11例、横位が7例、その他が7例の合計24例と大きな変化はないが、古墳時代前期には正位が6例、正斜位が1例、合計7例となつて、総数が大きく減るとともにほぼ正位のみとなる。

⑪棺身土器サイズ（胴部最大径）について（第15表、第2図）

土器棺の大きさを棺身土器の胴部最大径で比較すると、最小は河原口坊中遺跡（第1次）P21地区YH1号土坑の8.2cm、最大は河原口坊中遺跡（第1次）P23地区YH4号土坑の63.6cmで、分布の中心は20cm～30cm未満の範囲に17例、30cm～40cm未満の範囲に15例がある。時期別には、弥生時代中期後葉では22例のうち8例が20cm～30cm未満の範囲にあって最も集中しているのに対して、弥生時代後期では25例のうち20cm～30cmの範囲に7例、30cm～40cm未満の範囲に7例が分布している。事例が集中するサイズは通常使用されている土器の一般的な大きさであると考えられ、棺身土器サイズの分布状況は特別な状況を示すものではなく、全般的には日常的な土器サイズを反映しているものと考えられる。

おわりに

神奈川県内における弥生時代中期後葉から古墳時代前期の土器棺集成として57事例を集成し、このうち54事例を対象として項目毎に傾向をまとめた。前述したとおり土器棺として確実な事例はごく限られた数しかないため、「土器棺の可能性はある」と推定されるものを集成対象に含めて検討を行ったものである。この点をご理解いただいた上で、集成内容を利用していただきたい。また、集成の遺漏などについてご指摘いただけると幸いである。

（池田）